

近郊林地・緑地におけるレクリエーション集団の 行動に関する研究（第1報）

——都市住民の森林・緑地に対する誘意性測定の方法——

（その1）

宮崎大学農学部 中 島 能 道
九州大学農学部 塩 谷 勉

まえがき

本報告では、森林、緑地における現代人のレクリエーション行動を、もっとも原初的に動機づけさせる「潜在的誘意水準」を把握することを目的として、筆者らがサーストン(Thurstone, L. L.)の等現間隔法にのっとって試作した尺度を紹介する。

(1) 尺度の内容

われわれの尺度は、「質問紙による態度測定の方法」としてのサーストン法に準拠している。サーストン法は、一つの連続的な尺度をあらかじめ作っておいて、ある個人の、特定の対象にだしている好意度（ここでは森林・緑地に対する現代人の誘意性水準）を量的に把握しようとする方法である。

さて、われわれの尺度は、最終的に、表・1のとおりに決定し、検討の結果、一応妥当な「各項目の信頼性」と「各項目間の類似性」を得たものである。

表・1 サーストンの方法による「都市住民の森林・緑地に対する誘意性」測定の尺度

◎下に20個の意見が書いてあります。自分のもっている考え方と比べて「さんせい」と思うときは○印、「はんたい」の場合は×印、そして「わからない：別にどうということはない：さんせいと反対と半々」などのときは？印を、それぞれの意見の□の個所に記入してください。

- A. 自然のままの森林の静かな環境は騒がしい都会に住む人にとって、大事な場所である。
- B. 自然の環境や森林公園・緑地は、現代の都市に必要な不可欠なものではない。
- C. 都市周辺における自然環境の保護、森林公園・緑地の造成の必要性をやかましくいゝ過ぎるのは、現代感覚のとぼしい人である。
- D. 都市公害を防ぐのに有効な方法の一つは、広い森林公園・緑地を造成することである。
- E. 都市周辺の自然の森林は、近代的産業用地として利用すれば、もっと大きな利益が得られるはずである。

- F. 都市周辺の自然環境の中で、もっとも貴重なものが森林である。
- G. 森林公園や緑地を造成する余地さえあれば、都市周辺にそれを設けることが望ましい。
- H. 都市住民の中に森林公園造成や自然環境の保護の声が発せられるのなら、そうすべきである。
- I. 現代の土地不足の時代に、都市周辺に森林公園を造成するなどは、時代おくれの考えである。
- J. 現代の都市環境が悪くなったからこそ、森林公園・緑地の造成や、自然環境の保護が必要なのである。
- K. 森林公園の存在ほど、都市社会の発展を妨げるものはない。
- L. 森林公園は、すくなくとも都市周辺から無くしてしまわなければならないほど、無駄な施設である。
- M. 森林公園や自然環境は、都市住民の心身の健康上必要なものである。
- N. 森林公園の造成ということは、これからの能率的都市化の方向に逆行するものである。
- O. 都市周辺に広い森林公園をつくるという計画は、実現不可能な夢物語りである。
- P. 広い森林公園こそは、殺風景な都市にいくらかでも美しさを与えてくれるものである。
- Q. 森林公園・緑地は、都市のアクセサリーのようなもので、本来はそれほど必要なものとは思われない。
- R. 住宅団地や工場敷地の造成こそ、都市計画の発展につながるものである。
- S. 森林公園が広く自然環境もゆたかな都市の住民は、それらの無い都市に住んでいる人々から、きっと羨ましがられているだろう。
- T. 自然環境や森林公園が必要だ、と感じる割合が都市住民のそれぞれがおかれている環境によっては、それほど強くないことがある。

(2) 配点

それぞれの項目への配点は、次の手順を踏んで、表・2のように決定した。

まず、(i) 全体の意見を、高い誘意性と低い誘意性との2群に大別し、次いで(ii) 二つに分けた群ごとに「対比較法」によって順位得点を決め、(iii) 同じ順

位得点のものについては、再び対比較法による順位づけをおこなった。さらに(iv)順位得点を可能な最大得点の比率として求め、6～11点と1～6点の間に割り振り、かつ若干の手なおしをした。

表・2 森林公園・緑地など自然的環境に対する誘意性尺度の配点

高 い	記号	F	M	D	J	A	G	H	P	S	T
	配点	10.9	10.8	10.5	10.3	10.2	9.7	9.3	8.8	8.2	6.5
低 い	記号	K	R	L	O	I	N	E	C	B	Q
	配点	1.1	1.2	1.5	1.6	2.8	3.0	3.1	3.5	4.3	5.4

近郊林地・緑地におけるレクリエーション集団の行動に関する研究 (第2報)

—都市住民の森林・緑地に対する誘意性測定の方法—

(その2)

宮崎大学農学部 中 島 能 道
九州大学農学部 塩 谷 勉

まえがき

第1報では、尺度の内容と配点についてのべたが、本報では、この尺度を構成している各項目の信頼性と、項目間の類似性を検討した結果を報告する。

項目の検討は、宮崎大学農学部林学科3・4年次学生から選んだ29名と、同大学院林学専攻の学生3名を被検者として行われた。

(1) 各項目の信頼性

さきに見た20個の意見について、「さんせい」か「はんたい」かのいずれかの回答をさせた(第1回目の試

行)のち、しばらく時間をおいて(われわれの場合2週間)、再び回答させ(第2回目の試行)、その結果から次の式によって各項目の信頼性指数(または信頼係数)を求めた。

$$\rho = \frac{n_{12}}{\sqrt{n_1 n_2}}$$

ただし、 n_1, n_2 は、それぞれ第1回目および第2回目にその項目を「さんせい」(または「はんたい」と回答した者の数であり、 n_{12} は、両回ともにその項目を「さんせい」(または「はんたい」と回答した者の数である。

表・1に各項目の信頼性指数を示す。

表・1 各項目の信頼性

『さんせい』の反応					『はんたい』の反応				
項目	n_1	n_2	n_{12}	ρ	項目	n_1	n_2	n_{12}	ρ
F	32	32	32	1.000	K	23	24	20	0.851
M	26	24	20	0.801	R	20	20	19	0.950
D	20	19	16	0.821	L	16	14	14	0.935
J	16	16	14	0.875	O	10	10	9	0.900
A	11	11	10	0.909	I	14	12	12	0.926
G	8	8	7	0.875	N	9	9	9	1.000
H	7	7	7	1.000	E	7	7	6	0.857
P	7	7	6	0.857	C	6	6	6	1.000
S	5	5	5	1.000	B	6	6	6	1.000
T	3	3	3	1.000	Q	5	5	5	1.000